愛しき夜に

辻本　瞬

今日は一年で何よりも大切な日だ
だから僕は冷たいおむすびを持って来た

今年も地面に霜が降り
石に刻まれた君の名前を僕の指が撫ぜる

熱い食べ物が恋しくなる夜だったね
君が天へ旅立ったのは

あの日から何もかもがよそよそしい
魂の半分を失ったのだから

僕の握ったほかほかのおむすびを
よく二人で分かち合ったね
「美味しいわ　いつもありがとう」
と言う君の微笑みには何も敵わなかった

僕からの「ありがとう」ほ
まだまだ書い足りなかったのに
生きているっていうのは
君と食べるおむすびがあたたかいって事だったのに

君は
もう作り立てを食べられない

だから僕も今夜は
ここで固くなったおむすびを噛み締める

君の分をお供えするよ
祈りながら握って持って来たよ

相変わらず不格好だけど
君の大好きだったこれをかじってくれ
君は君の住む世界で
僕は僕の住む世界で

君と僕は一年に一日
冷たいおむすびで結ばれる

指輪

辻本　瞬

高鳴る鼓動の向こう側へ
音楽と共に
私の心を奪い去ったあなた
私はあなたの心に寄り添いたい

固い黒スーツの内側に
己の肉体を閉じ込めて
プラチナの鎖で自らの薬指を
あの人の心に縛り付けているあなた

触れて欲しい
指輪をはずさぬその指で
あの人を抱いたその腕で

自分の楽器を我が子のように
優しく愛でて
大切に歌わせるあなた
私はあなたの楽器にはなれないかしら

止まらないこの気持ち
愛されたい
でも私は
愛されてはいけない人間

涙の止む日が来ないことなど
私はとっくに知っています
それでもあなたの奏でる調べに
私は幸せの欠片を見つけたいのです

相合傘

辻本　瞬

あの雨の夜
二人きりで歩くのは初めてだった
相合傘なんてしたくても
何となくぎこちなくて
それぞれの傘をさしていたね

帰り道
駅が近づくのが怖かった
到着すれば
「さようなら」
が待っている

傘が二つ並ぶと
私達の間には微妙な距離が
生まれたね
雨の音に声が消えそうで
必死に大きな声で話したっけ

このまま永遠に
二人で歩き続けられればいいのにと願った
相合傘なんて
できなくてもいいから
いつかできる日が来ると確信したから

あの雨の夜
別れの口づけなどまだできるはずもなく
「またね」
を繰り返しながら
それぞれ帰路についた

あの日が初めてだった
誰かと別れの挨拶を
再会の約束を結んで
独りになつた時に
涙が止まらなかったのは

今は同じ傘の中に
二人分の足音が揃う
願いは叶ったね
これからは晴れていたって
嬉し涙で世界が渉むよ